

[教育方法一般]

自分を見つめ直し、自らの偏見に気付く子どもの育成  
～出会いと振り返りに焦点を当てた4年生の人権教育の実践から～

新発田市立川東小学校 教諭 名古屋 康秀  
(現 三条市立栄中央小学校 教諭)

## 1 はじめに

新潟県人権教育・啓発推進基本方針(2020)は、障害者、女性、外国人など13の人権課題を掲げ、人権課題ごとに独自の計画と方針を示している。施策によれば、学校教育における人権教育の役割は大きく、施策実施から十数年経った現在、人権課題がより一層複雑化・多様化していることを鑑みたとき、子どもたちが「差別事象に気付く」・「自分ごととして捉える」・「自分を見つめ直す」・「かかわろうとする」といった思考のプロセスを大事にしながら、人権教育、同和教育を進めていくことが重要だと考える。

子どもたちは、差別や偏見はいけないと理解していても、自分の生活とのかかわりから差別や偏見を捉える意識は低く、軽率な行動をとるといった学校教育上の課題があった。一例を挙げると、外国語活動「世界のあいさつ」の学習で映像を見たとき、肌の色や服装、振る舞いに対して差別的な発言があったり、「背が高い」・「肌が黒い」など外見を根拠に、外国人に対して「怖い」というイメージをもつ子が複数いたりした。

また、4年生社会科「ごみのゆくえ」の学習で、自分たちと同じ年代の子どもが家計を助けるために働いている映像を見た時、「頑張っていて、すごい。」や「かわいそう。」という感想が多かった。外国では、自分と同世代の子どもたちが実際に直面している現実に対して、「かわいそう」で終わってしまうことに「自分ごと」としての希薄さを感じる。

人権について知識的理解はできているものの、実生活に反映されないことが筆者の教育実践の課題である。自身の実践を振り返り、筆者は、子どもたちが自分自身を見つめ直し、自分の言動が差別や偏見につながっていたことに自ら気付いてほしいと強く思う。子どもたちが事象に対して自分ごととして捉えたり、自分にできることを考えたりして、かかわろうとする子になってほしい。

事象を自分ごととして捉える事例として、井上(2020)は、「振り返り」や「応用・一般化」と関連させた「体験的な学習」が、人権侵害を解決せずにはいられないとする人権意識の芽生えに効果があることを明らかにした。磯貝(2019)は、かかわろうとする姿勢を「実践行動力」と名付け、実践行動力を育成するためには、段階的に指導過程を捉えるようにすることが充実した授業に結びつくことを明らかにし、「差別が分かる→自己の差別心に気付く→人としての在り方・生き方と関連付けて考える→共に立ち上がる」という一連の流れで授業を構成した。

筆者は、ここでは差別心を偏見として捉え、「自らの偏見に気付く」ことは最後ではないかと考える。当事者意識をもち、自分ごととして捉え、かかわろうとした時、以前の自分を振り返り、「自分は以前、偏見をもっていたのではなかったか。」と気付くと考えたからである。子どもが、自身の思考の変容を見つめ直し、以前の自分を振り返るためには、十分な時間と振り返り方の工夫が必要だと考える。もし、このことがなければ、差別事象を学んだ子どもたちの中には「自分は、差別される立場の人でなくてよかった。」と、誤った考えをもちかねないからである。

本研究では、「外国人」に対する人権課題を取り上げ、事象を自分ごととして捉え、自分を見つめ直し、かかわろうとする態度の育成を図るための単元構成を模索することを目的とする。先行研究で得た知見を活かし、「振り返りと一体化した体験的な学習」と「段階的に指導する順序性」を重視した授業づくりを行い、「自分ごととして捉える→かかわろうとする→自分を見つめ直す→自分の偏見に気付く」という思考過程を想定する。

特に、事象との出会わせ方を工夫し、子どもたちが外国の方と交流する「体験的な活動」を行い、自分ごととして捉える機会を設ける。子どもが事象に対してかかわろうとするような手立てを構想し、子どもが自分を見つめ直し、自分の偏見に気付くような場を設定する。このような一連の単元開発を行うことが、筆者が願う子どもの姿に結び付くものと考えられる。

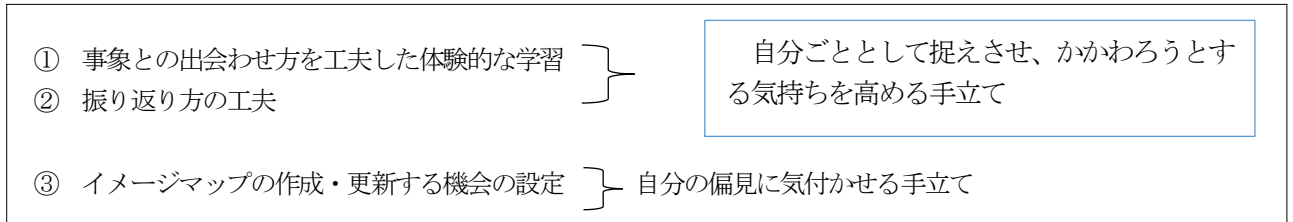
## 2 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

事象を自分ごととして捉え、かかわろうとし、自分を見つめ直し、自分の偏見に気付く子どもを育成するための教材開発と単元構成、手立てや支援の有効性と課題を明らかにする。

### (2) 研究の方法

研究目的を達成するため、以下の手立てを講じ、児童の発言・記述から有効性を考察し、検証する。



#### ① 事象との出会わせ方を工夫した体験的な学習

ア 子どもにとって身近なものから、外国につなげる。

本研究で取り上げた国は Bangladesh である。交流する人物は Bangladesh 出身の A さんである。Bangladesh はインドの東側にあるベンガル湾に面し、豊かな緑と多くの川と水路が特徴の南アジアの国である。外国語活動の際、子どもたちから知っている国を出させると Bangladesh は出てこなかった。

子どもたちにとって遠く感じる Bangladesh を身近な国にするために「食」に注目させた。Bangladesh の郷土料理はカレーを使ったものが多い。そこで、カレーを通じて、事象を身近な存在へと近づけることができるのではないかと考えた。新発田市内にはアジア・エスニック料理店が複数あり、「Bangladesh・インド・ネパール料理」の店もある。市内にあるアジア・エスニック料理店から、Bangladesh に着目させ、A さんとの出会いへと繋げようと考えた。

イ 事前調べ学習を行い、出会いの期待感を高める。

子どもがかかわろうと思うために、興味や親近感が大切だと考える。そこで、A さんと会う前に、Bangladesh について調べ学習を行う。調べ学習を通して、文化や宗教の違いや国旗が日本と似ていることなど、相違点や共通点を含め新たな発見に気付くと考える。

また、貧困など国が抱える問題を知れば、「A さんに直接聞いてみたい。」という気持ちが高まるだろう。興味が高まった段階で実際に A さんと交流し、そこで Bangladesh の現状や課題を直接語ってもらう。生の声で話してもらうことで、自分ごととして捉え、切実感を覚え、「放っておけない、なんとかしたい。」という気持ちを高めることができると思う。

ウ 外国の方(Aさん)から直接話を聞き、食を通じた異文化体験する機会を設定する。

子どもがかかわりたいという気持ちを高めるために、出会わせる事象が魅力的で身近でなくてはならない。本実践では、新潟県で活躍する A さんと交流し、Bangladesh の文化や宗教、国が抱える課題、さらに A さんが行っている慈善活動などについて実際に話を聞く機会を設ける。その後、Bangladesh の郷土料理であるカレーを調理し、一緒に食べる活動を設定する。Bangladesh は手を用いてカレーを食べる文化があり、その食べ方や歴史的背景を教えてもらう。また、交流日を、給食がカレーの日に設定し、Bangladesh と日本のカレーの違いを実感できるようにする。

#### ② 振り返り方の工夫

ア 子どもたちの疑問から次時の課題を設定する。

教師主導で授業を展開しても子どもは受け身になり、進んで事象にかかわろうとしないと考えた。そこで、授業の終末に振り返りの場を設け、新たに出てきた疑問を大切にす。その疑問を次時の課題にし、解決に向けて話し合ったり、調べたりして学習を進める。

イ Bangladesh の子どもを教材にした道徳の授業を単元に位置付ける。

『わたし8歳、職業、家事使用人。』(2018)は、Bangladesh で家事使用人として働く少女の実態を記した書籍である。この書籍を教材化しようと考えた。少女が、家事使用人として働く写真を見せ、自分と少女の1日の

生活スケジュールを比較する活動をする。自由時間がなく、睡眠時間も少ない状態で働き続けている少女の様子を知らせる。

最後に、物価の違いに触れながら、未成年の少女が就労し給料を得ていることについて話し、日本と比較する。自分たちとかけ離れた生活を送る少女の実態から、自分にできることはないかと考えさせる。

③ イメージマップの作成、更新する機会を設定する。

本単元では、思考ツールとしてイメージマップを用いる。イメージマップは単元導入で作成手順を学習する。最初は、作成の意図や方法を具体的に教師が指導する。マップ作りの手順は次の通りである。

まず、「外国人と聞いて頭に思い浮かべることやイメージしたことを書こう。」と言ってスタートする。中心に「外国の方」と書き、そこからイメージするものをクモの巣状に増やしていく。単元の最後にイメージマップを更新する機会を設定する。「イメージが変わったことがあれば、赤で書き直したり、加えたりしよう。」と伝えて、自分のイメージマップを更新する。加除修正を行う過程や完成したものを振り返り、自分を見つめ直す機会とする。

### 3 研究の概要

(1) 単元名 「自分が変わる、世界も変わる。」

(2) ねらい

- ・ 外国に興味をもち、交流を通して異文化への理解を深める。
- ・ バングラデシュの子どもの実態を自分ごととして捉え、自分を見つめ直し、かかわろうとする。

(3) 学習時間 6月1週～7月5週

(4) 対象児童 4年生 28人

(5) 単元の指導計画 (総合的な学習の時間10時間、道徳1時間、社会科1時間 全12時間)

事前活動	
[総合的な学習の時間] 1時間	外国人のイメージマップの作成・アンケート調査
[社会] 1時間	「ごみのゆくえ」ごみ山で働く少女
↓	
総合的な学習の時間	
3時間	小単元名 <b>【新発田市のアジアン・エスニック料理店】</b> 学習活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ HPに載っている新発田市のアジアン・エスニック料理店を調べる。</li> <li>○ どの国の料理が多いかを明らかにする。</li> <li>○ 料理店を出している理由を考える。</li> </ul>
2時間	小単元名 <b>【新潟県・新発田市にいる外国人】</b> 学習活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 市役所に直接電話して、在日外国人の人数と国名、在日理由を確認する。</li> <li>○ 新潟県に住む国際結婚したAさんを紹介する。</li> </ul>
4時間	小単元名 <b>【Aさんと交流】</b> 学習活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ バングラデシュの国や文化について調べる。</li> <li>○ 直接話を聞く。一緒にカレーを作って食べる。手で食べることの理由を知る。</li> <li>○ バングラデシュの実態と学校設立の活動について話してもらう。</li> </ul>
↓	
事後活動	
道徳1時間	<b>【働く少女 ルビナ】</b> 学習内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ バングラデシュで家事使用人として働く少女について知り、自分たちの生活と比較して考え、自分たちにできることを考える。</li> </ul>

### 4 活動の実際と考察

(1) バングラデシュに興味をもち始める子どもたち

新発田市内にあるアジアン・エスニック料理店の写真を提示し、何のお店かを尋ねた。「どの国の料理か？」など質問しながら導入した。何枚か写真を見せると、「新発田市にいくつぐらいお店があるのかな?」、「他にどんな外国料理店があるのかな?」と子どもたちから疑問が出てきた。

そこで、次時に調べると、新発田市内にあるエスニック料理店はアジアの一部の国の料理に集中していることが分かった。この中に、バングラデシュがあり、子どもたちは初めて聞いた国に興味をもち、世界地図で場所を確認し始めた。子どもたちから、「なぜ、アジアに集中しているのか?」、「なぜ、日本で出店するのか?」など新たな疑問が出てきたので、「誰なら、疑問に答えてくれるか?」と問うた。「市役所の人なら知っているのではないか?」という声が上がリ、実際に、市役所に電話をして聞くことにした(写真1・写真2)。



写真1：疑問や課題をまとめた板書

電話で新発田市役所にインタビューし、日本に来た理由の一つに国際結婚があることを知ると、子どもたちから、「どうやって知り合うのかな?直接聞いてみたい。」という声が出た。そこで筆者は、新潟県に住む国際結婚した夫婦としてAさん夫妻を紹介した。バングラデシュという国のこと、Aさんの武道精神、溢れる日本愛、慈善活動で母国に学校を設立したことを紹介すると、子どものAさんやバングラデシュへの興味が高まった。



写真2：市役所に電話をして尋ねる子ども

この場面では、「先生、次は、日本で働く外国人について調べるんだよね。」や「先生、家で考えたんだけど、なぜ自分の国ではなくて、わざわざ日本で働くのかな?」などの発言が多く、自分たちの疑問を次の学習の課題にし、自ら電話をするという行為に繋げることで、事象とかかわろうとする気持ちが高まってきたと考える。また、事象との出会いを工夫することで、「事象を自分ごととして捉え、かかわろう」とする素地を養うことができた。Aさんと直接交流し、生の声で語ってもらう機会があることを知り、学びが「自分ごと」へと進展していった。

(2) 外国人(Aさんに)に親しみをもち、バングラデシュを自分ごととして捉えるようになった体験的な学習

Aさんは、33年前に技術士として来日した。空手は範士となるほどの腕前で、長岡市で道場を開いている。故郷バングラデシュ・ナマブテイヤ村に学校がなかったことから、学校設立に向けた「アジアンマザー草の根運動」の活動を始め、2016年に学校を設立した。その活動が称賛され、2019年に長岡市の米百俵賞を受賞した。数々の取材やテレビにも出演し、多忙な日々を送っている。



Aさんが、一番力を入れている活動は、国際理解教育の推進である。日本の子どもたちが異文化を体験的に理解し、自分たちの今の生活に感謝できる子になってほしいと願っている。また、Aさんは、活動で集めた資金を故郷に送り、学校運営維持費に役立っている。



写真3：Aさん夫妻と映像を見つめるC1

交流会当日、Aさんは笑顔で登場し、やさしく子どもたちに語りかけ、時折ジョークも交えながら楽しく話をしてくれた。子どもたちはAさんの魅力的な人柄に引き込まれていった。Aさんが紹介する映像を食い入るように見る子どもの様子から、バングラデシュの実態やAさんの妻の活動に興味をもち、人の役に立てるように努力することの大切さが子どもたちに深く伝わっていることが分かる(写真3)。

話者	発言内容
Aさん Aさんの妻	・ 学校はテストがあるんですね。年に3回テスト、33点以上取らないと上の学年にいけないんです。
C1 Aさん	・ 日本は、1年生は全員2年生になれる。2年、3年と全部上に上がれるけど、バングラでは、他の国でもけっこう多いんだけど、ある程度点数を取らないと、その子1年生もう一回やりなおし。

C1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ えー</li> <li>・ その時、発表はこんな感じでみんな集まる。</li> </ul>
Aさん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年生だけをやるの？点数がよくて上がれる子は上がるけど、そうでない子はもう1年やり直し。やだね。留年じゃん。</li> <li>・ 親たちもみんな来ます。みんなで同じ友達で一緒に行けるのは最高だよ。でも、そうでない国はいっぱいあります。</li> </ul>

表1：【Aさん夫妻とC1とのやりとり】

表1では、Aさんから直接バングラデシュの学校事情を説明されることで、C1が、自分たちの状況に置き換えて考え、自分の生活を見つめ直したことが分かる。Aさんと出会い、直接話を聞くことで、事象を自分ごととして捉えたと言える。

その後、カレー作りの活動を行った。インディカ米を使用し、香辛料や味付け方法が日本と異なり、子どもたちは食を通して異文化を理解していった。また、バングラデシュは手を使って食べる文化があり、Aさんは右手で米とカレーを潰して一緒に食べた。バングラデシュでは、自分の手が一番安全であり、神聖なものだと考えられている。Aさんから説明を聞いて、子どもたちはバングラデシュの歴史的背景を学ぶことができた。

(3) 事象とかかわろうとし、自分たちにできることを考える子ども

活動を終え、子どもたちと話し合う場を設定した。子どもたちの思いを黒板に分類しながら記録した。子どもたちは、バングラデシュの子どもたちのためにできることとして、募金や廃品回収など自分たちで資金を作り、次回Aさんが来たときに渡すというアイデアを出した。

B男は振り返りで、次のように書いた。「お金をきふしたところでなくなったらすぐあげることはできません。…(中略)…お金をつくるようじょうやだいくをつくらたいと思います。」この記述は、交流会の際、Aさんが紹介した内容と関係している。Aさんは、自身の活動として、「自治できるよう養殖池で養殖した魚やバナナの木を植えてバナナを売って資金調達している。」という話をしていた。一時の寄付だけでは、学校設立の維持は難しい。B男はそこからシステムづくりをした方が、バングラデシュの子どもたちのためになると考えたのではないだろうか。一過性の寄付よりも、持続可能で自治的なアイデアを提供するというAさんの趣旨にB男が進んでかわり方を見出したと考えられる(写真4)。

(4) 自分を見つめ直す子ども

事前活動時、ごみ山で働く少女を題材に道徳の授業をした。筆者は、ここで少女へ手紙を書く活動を行うことで、子どもの本音を出させたいと考えた。

最初にC2は、「いつも、朝早くごみ山に行くんだね。」と書いた。記述は事実のみに留まり、自分の感情の変化や少女に対する気持ちについては触れられていない。

事後活動の振り返りでC2が書いた感想文では、「日本は、土・日がい学校に毎日通えるのにバングラデシュはお金がないと学校に行けなくて働いている…わたしは学校に行けること・行くことを大切にしたいと思います。」と書いた。道徳授業の際、Aさんとの交流やAさんとかかわりから学んだことを筆者がフィードバックすることで、自分の生活を見つめ直し、学校に「行けること」ことへの感謝まで思いを巡らせているC2の成長が伺える(写真5)。

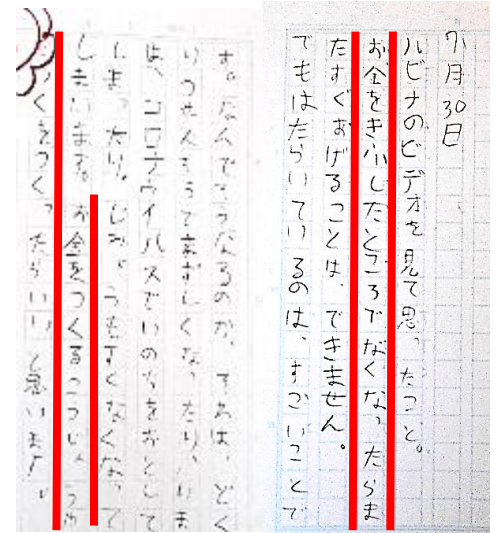


写真4：授業後のB男の感想文

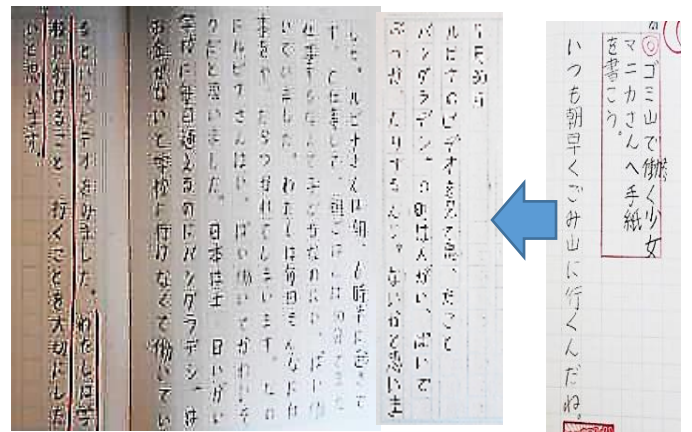


写真5：C2の振り返りと変容

(5) イメージマップ作りで、外国人に対してのイメージが変わり、自分の偏見に気付く子ども

事前活動として、子どもたちが外国人に対するイメージを可視化する「イメージマップ作り」を行った。教師が「外国人と聞いて頭に思い浮かぶことを書こう。」と伝えたら、C3は、次のようなイメージマップを作成した。

最初に出てきた言葉は、「こわい・日本人とは目の色が違う・英語・食べ物が違う・中国フィリピン・髪の色・服装が日本と違う」であった。筆者は、更にイメージしたものを加えること、記述の理由を添えるよう伝えた。すると、C3は「こわい」の理由を「背が高い・肌の色が茶色」と記述した。C3は、「目の色・背丈・肌の色・髪・服・食」など外見や食の違いのみ注視するC3の状況が伺える。

Aさんとの体験的な学習を行った後、外国人に対するイメージについて再度考え、イメージを更新する活動を行った。筆者は、イメージが変わったものについては赤鉛筆(×印)の修正を入れるよう、イメージが広がったものは赤鉛筆で加えるよう伝えた。C3は「こわい」を消して、その理由を「会ってみるとそんなにこわくなかった。」「声大きい。」と書いた。さらに派生して、「リアクションが面白い、笑顔」と具体的に書き加えていた。(写真6)

今までは外見による違いにこわさを感じていたC3が、実際にAさんと交流し、Aさんの人柄・性格・内面から表出するものを受け取ったことをイメージマップに反映させていることが分かる。

次時、筆者は、根拠なく「こわい」というイメージをもつことを「偏見」と教え、偏見の恐ろしさを、Aさんとのかかわりから学んだように「自分ごと」としてかかわる大切さを全体で確認した。

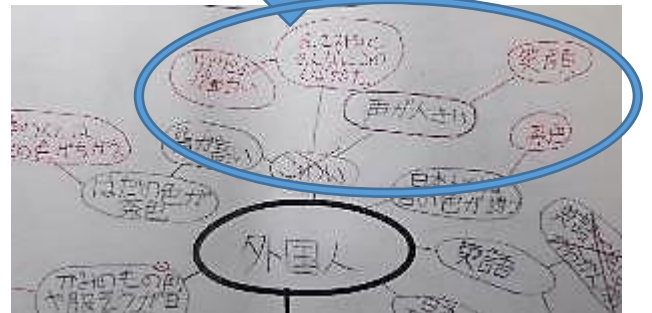
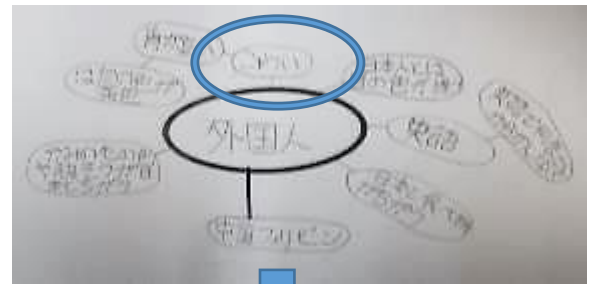


写真6：C3のイメージマップの変容

## 5 研究のまとめ

事象を自分ごととして捉え、かかわろうとし、自分を見つめ直し、自分の偏見に気付く子どもを育成するための教材開発と単元構成、手立てや支援の有効性と課題を明らかにした。

子どもに身近なものから外国につなげ、事前調べ学習を行って出会いの期待感を高め、さらにAさんから直接話を聞いて異文化体験をするという一連の流れで授業を構成したことで、始めは遠かった事象を自分ごととして捉え、かかわろうとすることに有効であった。また、Aさんと同じバングラデシュの子どもを教材にした道徳の授業を単元に位置付けることで、さらに子どもたちは、自分たちにできることを考え、かかわろうとする姿が見られた。イメージマップを用いて以前の自分と今の自分を比較する活動は、自分を見つめ直し、偏見をもっていたことに気付かせることに有効であったと結論付ける。

複雑化・多様化する人権問題に立ち向かえる人権感覚を身に付け、解決に向かってともに歩む子どもの育成が急務である。外国人への偏見に加えて、差別という人権問題に対して「憤る」・「差別を許さないと決意する」・「立ち上がる」というかかわる姿の高まりが今後求められる。自分の偏見に気付いたら、偏見をしないように心がけ、実践する子どもの育成は、こうした実践の継続的な積み重ねによるところが大きい。そのために、本研究で明らかにした思考過程をもとに、人権教育や同和教育における思考過程、単元開発を行うことを今後の課題とする。

### 【参考・引用文献】

- 1) 新潟県教育委員会、「新潟県人権教育・啓発推進基本方針」, 2020年
- 2) 磯貝邦彦「自他を大切に子どもを育てるための指導の工夫」, 教育実践研究第29集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2019年, 175~180 pp
- 3) 井上菜穂「体験的な学習を踏まえた人権感覚の育成」, 鳴門教育大学紀要第35巻, 鳴門教育大学, 2020年, 81~92 pp